

平成 22 年度公開教学講座「現代社会と天理教」(1)

第 2 講：道に道あり

澤井義則

はじめに

価値観が多様化した現代社会において、「我さえ良くば、今さえ良くば」の自己中心的、利己的生き方が広がりつつある。こうした風潮の中で他者とのつながり意識が希薄化し、確かな心の拠り所もなく、生きがいある人生や生きる意味を見出せずに苦悩している人も多い。

一方、教内では、教勢の低迷が言われて久しい。上田嘉太郎表統領は、「教勢低迷の問題は、お道の者みんなの問題」と述べるとともに、教勢の活性化へ向けて、「日常生活の中で『教えに基づく生き方』を社会へ映していただきたい」と要望した。

「おさしづ」に、「ぢばも鏡なら、世上も鏡、世上の理も映れば、ぢばの曇りも皆映る。」(明治 30 年 2 月 1 日) と論されているように、いま、私たちに求められているのは、現代社会という“世上の鏡”に「道に道無い」姿ではなく、「道に道有る」生き方を映し出していく努力であろう。

そこで、教祖によって説き明かされた確かな心の拠り所、つまり人生の根源的な価値を再確認することにしたい。

お道のコスモロジー—神観・世界観・人間観—

お道の信仰は、教祖が「月日のやしろ」であると信じることである。それは取りも直さず、教祖における顕現主体である親神への信仰を意味する。

親神は、「人間を造り、その陽気ぐらしをするのを見て、ともに楽しもう」との思召から、人間および世界を創造した「元の神」であり、爾来、人間をはじめ万物の存在を守護している「実の神」である。親神は、世界一れつの人間をたすけるために、教祖を「やしろ」としてこの世に顕現し、人間救済の具体的手段として、「つとめ」(よろづたすけの道)と「さづけ」(身上たすけの道)を教えられた。

お道の世界観は、「この世は神のからだ」というお言葉に端的に示されている。つまり、人間の住んでいる世界は親神の十全の働きによって守護されており、人間は神の懐住まいをしているということである。「元の理」によれば、自然世界は人間の成人に応じて生成しており、両者のあいだには存在論的に相関性がある。また、人間は水中の住いの後、虫、鳥、畜類などと八千八度の生まれ変りを経て成人してきたとある。ここに、生きとし生けるものの生命的連続性、言い換えれば、自然と人間の調和と共生のあり方が示唆されているといえよう。

そして、お道の人間観については、「人間というは、身の内神のかしもの・かりもの、心一つ我が理。」(明治 22 年 6 月 1 日)と論されるように、人間はそれぞれ親神から 9 つの道具を借りておりと同時に、身の内に入込んでお働きくださっている親神の十全の働きをも借りておりと教えられる。私たち人間は皆等しく、親神の十全の働きによって守護され、生かされて生きている。ただ、「心一つ我が理」とあるように、人間には心の自

由が許されている。しかも、その心は、たとえ夫婦、親子、兄弟姉妹といえども、皆一名一人異なると教えられる。

この「かしのもの・かりもの」の教理に込められた真実に目覚めることこそ、お道の信仰生活の出発点であろう。

教えに基づく生き方—人生観・倫理観—

教祖によって啓かれた道は「神一条の道」である。そして、神一条の道は「たすけ一条の道」であり、「誠一条の道」でもある。その道を通るのは、私たち一人ひとりの人間である。したがって、神一条の道は「心次第の道」(明治 30 年 2 月 1 日)ともいわれる。神一条の道を一筋に通るのも、千筋に通るのも、また万筋に通るのも、私たち一人ひとりの心次第なのである。

ところが、私たちはややもすると銘々に許された心の自由を履き違えて、親神の心に反する心遣いをしがちである。ただ、ありがたいことには、身上の患いや事情を節として、ほこりの心遣いを改め、心を入れ替える契機を与えられることである。今日、地球環境を含めた社会全体が病んでいるのは、世上の鏡に映し出された私たち人間の心の姿と受けとめ、自らの心遣いを反省するとともに、生き方を改める契機とすべきであろう。

では、どのような生き方をめざすべきなのであろうか。それは親神の人間創造の目的であり、人生の究極的意義でもある「陽気ぐらし」にある。「陽気ぐらし」世界はお道がめざす理想社会であるが、私たちは「陽気ぐらし」世界の実現をめざしつつ、日々「陽気ぐらし」をしなければならぬ。それは、人間は皆等しく親神の子として「一れつきようだい」であるとの根本的自覚に立ち返った「互いたすけ合い」の生き方を実践して生きることにはほかならない。

「おさしづ」に、「神が連れて通る陽気と、めんへ勝手の陽気とある。勝手の陽気は通るに通れん。陽気というは、皆んな勇ましてこそ、真の陽気という」(明治 30 年 12 月 11 日)と論される。私たちがめざすべき陽気は、「めんへ勝手の陽気」ではなく、「神が連れて通る陽気」でなければならない。すなわち、それは互いに他者を勇ませる「互いたすけ合い」の生き方であり、それが取りも直さず、自らの陽気となり、勇みとなるということである。

まとめにかえて

「道と世界と一つの理立て合い(中略)年限いずみへ、いずめば道盛んとは言えまい。心も盛んは道の盛ん。もう楽しみの心十分持つてくれにゃならん。」(明治 35 年 8 月 4 日)と論される。また、「さぎのほんみちたのしゆでいよ」(三号 37)ともあるように、道と世界がいかに困難な状況にあろうとも、楽しみと希望を持って真実誠の心で歩むことを促されている。

社会が良くなるのも、教内が活性化するのも、「神一条の道」を歩む私たち一人ひとりの生き方にかかっている。道が勇めば世上も勇む。そのためにも、一人ひとりが「神一条の道」に世上の道を持ち込むことなく、一筋に教えに基づく生き方を社会へ映す努力を続けていかなければならない。そうすれば、必ずや教勢活性化につながっていくであろう。

第 227 回研究報告会

「南米南部における天理教伝播と受容に関する一考察」

野口 茂

1980 年代後半以降、ラテンアメリカ諸国では新自由主義経済改革の名のもとで、規制緩和や民営化、税制改革など一連の政策が推進された。これにより、マクロ経済の安定化と成長という一定の成果は見られたが、失業率の増加だけでなく不安定雇用も拡大したため、貧困層の比率は改善されることなく依然高い水準を保っている。

アルゼンチンの宗教事情を調査したブエノスアイレス大学講師 Fortunato Mallimaci は、経済的・社会的不平等が拡大し、社会不安が増大していく中で、社会の周辺に暮らす人々（低所得者層だけでなく、経済の低迷によって疲弊した中産階級）にとって、「宗教による救済」がいま必要とされてきていると指摘する。救済とは、たんに奇跡的な病の治癒だけを意味するのではない。社会や他者との絆が失われ、自らの生に希望を見いだせないでいる人々にとって、彼らの人生に「意味」を付与し、さまざまな苦悩に何らかの「答え」を明示してくれることをさす。さらには、自尊心を高め意識を変革させ、今置かれている状況を改善させていくために、その力の源泉となりうるような宗教が求められているのである。

そうした社会状況や宗教的風土において、いま南米南部のアルゼンチンでは天理教はどのような形で現地の人々に受容されているのか、また入信し信仰を深めていくうえで何か問題があるとすれば、それはどのようなものなのか。個別におこなった信者や布教師へのインタビュー（質的調査）と、不特定の信者を対象とした質問票配布（量的調査）を補完的に併用して考察を試みた。

伝道研究会

「アメリカスの日系宗教（5）」を開催

6月15日（火）、2008年度から行ってきた標記テーマ

での最後の研究会を行った。

加藤匡人氏（天理教海外部翻訳課）「日系アメリカ人天理教信者の研究—サンフランシスコ・ベイエリア在住二世信者の事例を通して—」

加藤報告は、戦後、サンフランシスコへ渡って布教に従事してきた人々（新一世）の次の世代（日系二世）である天理教信者が、取り巻く社会的文化的要素との関係で、どのように自己のアイデンティティをとらえているかを検証することを目指したものである。日系二世信者のアイデンティティを、①日系アメリカ人のアイデンティティ、②アジア系アメリカ人というエスニシティを軸にした二分類と、③天理教信者としてのアイデンティティ、④日系二世信者としてのアイデンティティという天理教信仰にかかわる二分類の計四分類をたて関係性を分析した。

討論では、方法論としての対面調査の方法、調査対象となった日系二世の属性など、多岐に及んだ。日系二世の価値観と教団文化との間の軋轢は、日系二世に限ったものではないことに対する注意も喚起された。天理教の海外布教は、移民した日本人を対象に始まったが、一世紀を過ぎても、その枠組みがさして変わっていないのが現状である。現代における天理教の海外伝道研究と移民研究の親和性は、つまるところ天理教の布教の現状が、信仰継承（いわゆる縦の伝道）に力点がおかれていることと関係があるだろう。

討論ではまた、アメリカの個人主義に対する指摘があったが、時代を問わず、家の宗教を離脱する意思は個人主義がないと生まれないのではないかと私などは考える。今後の海外伝道のあり方を模索するとすれば、移民ではなく、現地人の入信・離脱を多方面から検討し、なぜ異文化の宗教である天理教に入信したのか、あるいはなぜ離脱したのかに対する理解を深め、それを布教のあり方にフィードバックすることが必要に思われる。直面する課題を伝道史研究にも鋭く投影し、見失われたり後景に退いたりしたものにこそ、光を当てる必要があるように思われる。（文責・幡鎌）

新刊案内



本書は、標題の分野において、具体的・現実的な経営的实践との接点を持ちつつ、体験の知と理論の知の相互浸透をはかり、陽気ぐらし世界の建設のためのひとつの学問的貢献をおこなうことを目指すものである。第1部では、2000年から2002年の連載が加筆修正され、天理教における「信仰と経営」が論じられ、第2部では、2009年から2010年の連載をもとにして、新しい論考が加えられている。（頒価 800 円）



本書は、2009年3月に行われた第5回伝道フォーラム「アフリカにおける天理教の活動」での発表の報告である。佐藤洋司氏によるケニア・チャフルでの活動、海外部梶本育郎氏のコンゴブラザビル教会の鼓笛活動報告、最後の医療班医師となった左野明氏の報告とアフリカへの思い、アフリカ研究を専門とする和崎春日氏のアフリカとの交流についての講演が集録されている。（頒価 400 円）

信仰に基づく社会貢献活動とは

—お道における NPO・NGO の可能性を考える—

【開催趣旨】

今、宗教の社会貢献が問われている。もともと、人だすけこそ宗教の使命であり、実際の宗教もそのように実践しているはずなのに、あえてなぜ今そのように問われているのだろうか。それは、社会的存在としての宗教が、信者や信者候補者以外の一般の人々に対して公益的役割を果たすことが求められているからである。こうした宗教のあり方を「公共宗教」とも呼ぶ。

私たちの周囲を見回してみても、本教をはじめとして、いかに多くの宗教が教団や教会・寺院、あるいは宗教者個人を単位とし、さまざまな形で非営利組織（NPO）、非政府組織（NGO）を作り、積極的な対社会的活動を行っているか知ることができるだろう。こうした公益活動は、宗教本来の救済の活動や布教伝道と、どのように両立するのだろうか。少なからぬ宗教者がこの問題をめぐって悩んでいるのも事実である。

そこで、今回の「教学と現代VII」では、《信仰に基づく社会貢献活動とは》というテーマの下に、本教を含めた宗教の NPO・NGO 活動の現状と課題について共に考えていきたい。現在、そのような活動に関わっている教友、また将来自分でも NPO・NGO を組織したいと考えている教友に、ぜひ受講していただければ幸いである。

担当講師とテーマ

- 金子 昭（研究所員）：宗教の社会貢献と NPO・NGO 活動 —その入門的概説—
- 堀内 みどり（研究所員）：ネパールの NGO「Love Green Nepal」と本教の活動
- 野口 茂（研究所員）：宗教 NGO による国際協力活動の取り組み
- 佐藤 孝則（研究所員）：環境市民ネットワーク天理 —おぢばでの官民教学協働の NPO—
- 金子 修（瑞友分教会長）：あらゆる難渋への対応をめざして —教会活動を新たに切り開く NPO・NGO の提案—
- 平野 恭助（道竹分教会長）：一布教師としての国際救援の歩み —岡山から世界の難儀へ—

【申し込み方法】

①氏名 ②住所 ③年齢 ④所属教会と教会でのお立場
⑤連絡先住所 ⑥電話・ファックス番号 ⑦Eメールアドレス ⑧受講の動機や関心のあるテーマなどをお書きの上、天理大学おやさと研究所まで、郵便もしくはファックス、Eメールにてお申し込みください。

【注意事項】

全講義受講を原則といたします。受講者には修了後に修了証書を授与いたします。受講費（資料・昼食代を含む）として3,000円をいただきます。宿泊は各自でお願いいたします。定員は30名とさせていただきます（定員になり次第、閉め切らせていただきます）。

開催日：2010年8月28日(土)

開催場所：おやさと研究所会議室

【申し込み・問合せ先】

天理大学おやさと研究所天理総合人間学研究室（金子昭宛）
FAX:0743-63-7255

Eメール：akira-k@sta.tenri-u.ac.jp

*受け付け次第、お返事を差し上げます。返事がない場合は、お手数ですがファックスでご連絡ください。